

主体的に学習に取り組む態度を育てる小学校外国語の指導 ～自己調整力を身に付けるリフレクションのあり方～

新潟市立東山の下小学校 教諭 佐々木 泰史（平成29年度）

1 主張

本研究で目指す児童は、「主体的に学習に取り組むことができる児童」である。児童は、外国語で発話する自信がもてず、その課題を自らが自覚し、解決することが難しい現状がある。そのため、自ら学びを止めてしまう児童もいる。そこで、児童が自分の学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぶことができる力を身に付ければ、主体的に学習に取り組む態度が養われると考えた。本研究では、児童一人一人が自己の課題を把握し、自身の学習を調整し、主体的に学習に取り組む態度を高めるために、木村（2023）が作成したレギュレイトフォームを参考にした自作の振り返りカードを用いたリフレクションのあり方を提案する。

2 研究主題設定の理由

文部科学省（2017）は、小学校学習指導要領において資質・能力の一つとして、「学びに向かう力・人間性等」を示した。この資質・能力には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分を示している。加えて文部科学省（2019）は、「主体的に学習に取り組む態度」について、「粘り強い取り組みを行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」で評価するとした上で、メタ認知力や自己調整力の育成が重要であると示している。また、文部科学省（2021）中央教育審議会の答申では「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」の「個別最適な学び」の解説において、教師が児童一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、児童自身で学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」が必要であることが述べられている。

このような中、私は自己調整学習が重要な役割を担いうる教育心理学理論と考える。ZIMMERMAN（1986）は、自己調整学習を「学習者が、動機付け、学習方略、メタ認知において、自分自身の学習過程に能動的に関与する」と定義し、学習者が周囲の環境との関わりを通じながら自分の学習過程に能動的に関与する現象を特徴付けている。また、木村（2023）は、資質・能力の一つである「学びに向かう力・人間性等」における「主体的に学習に取り組む態度」と自己調整学習は、密接に関わっていると示している。これらの理由から私は、児童一人一人が主体的に学習に取り組むためには、学習方略を工夫したり、改善したりして自分の学習を調整できる力を育成する必要があると考える。

これまでの私の外国語の授業を振り返ると、学習が滞っている児童は、自分の課題を把握していないために、どのように学習を進めて行けばよいか分からないまま、発表ややり取りなどに自信をもてずにいた。また、学習が進んでいる児童は、必要最低限の英語表現を覚えることができたら、それ以上の発表内容の吟味や付け足しなどに意識が向かず、学びを止めてしまうことがあった。これらの児童の姿から私は、児童が自分の課題を自覚し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぶことができる力（自己調整力）を身に付けさせたいと考えた。本研究では、自己調整学習を取り入れることで、児童一人一人が自己の課題を把握し、自身の学習を調整できる力を高めるために、木村（2023）が作成したレギュレイトフォームを参考にした自作の振り返りカードを用いたリフレクションのあり方を提案する。

3 研究仮説

自己調整力を身に付けるリフレクションのあり方を工夫することで、児童が主体的に学習に取り組むことができるだろう。

4 研究方法と内容

(1) 研究内容

- ①自己調整力を身に付けるための振り返りカードの活用
- ②児童と共に作成するルーブリックの活用

(2) 研究方法

令和6年度、令和7年度6年生に対して研究仮説に基づく実践を行う。

〈検証方法〉※1 自己調整スキルの検証

- ①抽出児の自己調整スキル（主に【帰属】）の質的検証
「児童とのやりとり、振り返りカードの記述から」
- ②学級全体の自己調整スキル（主に【評価】【適用】）の量的検証
「振り返りカードの記述から」

資料1 振り返りカード



資料2 ルーブリック（※実践2以降使用）

Unit5		自分の目標（どんな発表にしたい？）	
★三つ星チェック★			
	内容	言語	
☆	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・内容を覚える ・図やマークを上手に入れる ・英語のサイズ（横の長さ） ・写真を上手に見せる 	<ul style="list-style-type: none"> ・①② ・発音（声やい） ・What is it? / Do you like? / Do you know? / Thank you for listening. / Hello! ・ See you! 	○
☆	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介したいことについて説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・Unit5で習った英語を使う ・構文翻訳をそのまま使う 	○
☆	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとできる！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとできる！ 	○

※1 自己調整スキル

- 「評価」（自らの学習を評価する）
- 「帰属」（なぜそのような結果になったのかを考える）
- 「適用」（評価結果をその後に生かそうとする）

ア 自己調整スキルの表出の量的な検証
 児童一人一人の振り返りカードに記入された記述を、「評価」スキルと「適用」スキルの発揮から表出した記述で量的な検証をする。振り返りの内容を◎○▲評価で判定し、人数を算出する。評価基準は右の通りである。

資料3 自己調整スキルの発揮から表出した記述を量的に検証する評価基準

評価	評価基準
◎評価	振り返りに、成果や課題【評価】と次時にやること【適用】が記述され、前時に決めたやることと本時の成果や課題に整合性がある。加えて自分の課題を解決するためにどのように改善していくか具体策を記述している。
○評価	振り返りに、成果や課題【評価】と次時にやること【適用】が記述され、前時に決めたやることと本時の成果や課題に整合性がある。
▲評価	振り返りに、成果や課題【評価】と次時にやること【適用】が記述されているが、前時に決めたやることと成果や課題に整合性がない。

イ 自己調整スキルの相関性の検証
 人数を算出したら、○評価以上の児童の記述を分析し、自己調整スキルがどのように相関しているかを示す。そして、以下のような加点式で評価する。

【評価方法】
○前時の「次の時間に何をやるか」と、次時の成果、または「何をやるか」(学習方法)に整合性がある。…1点
A評価…3点 B評価…2点 C評価…1点

資料4 相関関係の検証における評価方法

振り返り	【本時】	振り返り	【次時】
【①うまくいったこと②うまくいかなかったこと③次の時間に何をやるか など】 今日うまくいったことは、 <u>プレゼンの英語の発音が全て録音できて、提出できたこと</u> で、 <u>友達に相談したり翻訳機を聞いたりして英語を話しました。</u> あとプレゼンのイラストも少しだけできたので良かったです。うまくいかなかったことは、今日はなかったかなって思います。次は、 <u>プレゼンイラストを半分くらいまで完成させたいです。</u>	1点	【①うまくいったこと②うまくいかなかったこと③次の時間に何をやるか など】 今日は、 <u>プレゼン作り</u> に専念して頑張りました。めっちゃ <u>ちゃんプレゼン</u> にはこだわりたいので、 <u>丁寧</u> にやりました。うまくいかなかったことは、 <u>撮影の時に英語を喋っていて少し詰まっていたので、もっとスラスラ英語を言いたいです。</u> 次の時間は、 <u>発表練習</u> を頑張りたいです。	

資料5 振り返りカードの点数化 (例)

5 研究の実際

(1) 実践1 NEW HORIZON Elementary English Course 6 “Unit4 Let’s see the world.”における自己調整スキルの発揮と表出

① 抽出児Aの自己調整(主に【帰属】)スキルの発揮と表出の質的検証(5時間目/全8時間)

抽出児AはALTに、「イタリアでは、美味しい食べ物がたくさんある。」ことを伝えたいと考えていた。単元の4時間目の紹介するために練習した振り返りでは、「(イタリアでは)『ピザが食べられません。(生地が)薄くて美味しいです。』がうまく伝えられない。」「発音が分からなかったので、次の時間は友達に聞いて発音練習をしたいです。」と記述していた。

5時間目冒頭の抽出児とのやりとりが右の通りである。前時での自己の課題を意識できていない様子から、「帰属」スキルが発揮されていないと判断した。

(T:担任 C:抽出児A)
T:今日は何をやるの。
C:「調べる」と「原稿作り」をやります。
T:今日は何でこの2つをやるの?
C: <u>うーん、なんとなく。</u>
T:なるほどね。前回できなかったことは何だったの?
C: <u>ええと、忘れました。</u>
T:そっか。じゃあ今日はこの2つができたなら次に何する?
C:うーん、発音練習でしようかな。
T:わかった。じゃあ今日はこの3つだね。

② 検証②

ア 自己調整スキルの表出の量的な検証

評価	割合
◎評価	3%
○評価	34%
▲評価	63%

上位37%をさらに分析

イ 自己調整スキルの相関性の検証

【結果】
 3点:1人/2点:5人/1点:6人

(2) 実践2 NEW HORIZON Elementary English Course 6 “Unit5 Where is it from?”における自己調整スキルの発揮と表出

① 抽出児Aの自己調整(主に【帰属】)スキルの発揮と表出の質的検証(5時間目/全8時間)

友達に身の回りのものと世界とのつながりを発表する単元において、抽出児Aは、「自分の持っている洋服がどこ産かというクイズを出して、中国とのつながりについて興味をもってもらいたい。」という思いをもっていた。単元4時間目の紹介する内容を考えた振り返りでは、「ただ発表するだけでは、興味をもってもらえないからクイズを付け足して、聞いている人に楽しんでもらいたい。」と記述した。5時間目、単元1では教師の問いかけから「帰属」スキルの発揮を引き出していたが、児童同士のかかわりから引き出すために、児童とともに作成したルーブリックを活用させた。相互評価後の抽出児Aとのやりとりは右の通りである。

ルーブリックの内容面には、質問やクイズを付け足すとある。ここから5時間目の始めに右のようなやりとりをしたが、前時での自己の課題を意識して、具体的どのように学習するか計画して、課題を改善しようとする記述から、「帰属」スキルが発揮されていると判断した。

Unit5		自分の目標(どんな発表にしたい?)
★三つ星チェック★		中国と日本のつながりをよく知ってもらえるような発表にする。
	内容	言語
☆☆☆	・あいさつ ・内容を整理 ・図のとくちょうを入れる ・質問クイズ(得意か?) ・写真を使い挿せる	・(国) ・服装(色や) ・Where is it from? ・Do you like it? ・Do you know it? ・Thank you for listening. ・Hello ・See you!
☆☆○	・紹介したいことについて説明する	・Unit5で習った英語を使う ・機械翻訳をそのまま使う
☆☆	・もっとできる!	・もっとできる!

資料6 抽出児Aのルーブリック

(T:担任 C:抽出児A)
T:今日は何をやるの。
C:「原稿作り」と「発表練習」をやります。
T:なるほど。なんでこの2つなの?
C: <u>面白くないから前回の原稿に(内容を)付け足したいし、スラスラ言えないからこれにしました。</u>
T:なるほどね。練習は一人で進める?
C: <u>最初に自分でやってみて、分かんなかったら先生か友達に聞いて練習します。</u>
T:どう進めるか具体的にいいね。じゃあこれで今日は頑張ろうか。

② 検証②

ア 自己調整スキルの表出の量的な検証

評価	割合
◎評価	16%
○評価	56%
▲評価	28%

上位72%をさらに分析

イ 自己調整スキルの相関性の検証

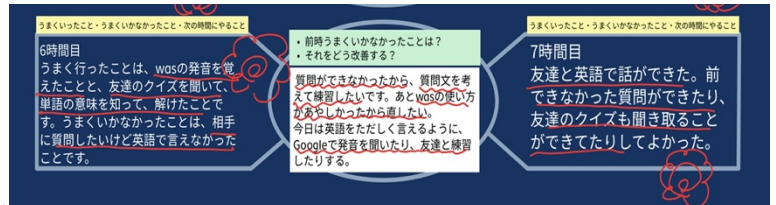
【結果】
3点：5人／2点：13人／1点：5人

(3) 実践3 NEW HORIZON Elementary English Course 6 “Unit3 My Weekend” における自己調整スキルの発揮と表出

① 抽出児Aの自己調整（主に【帰属】）スキルの発揮と表出の質的検証（7時間目/全8時間）

実践1, 2では、教師とのやりとりの中で自己調整スキルの表出を見取っていたため、児童には思考した跡が残らなかった。そこで実践3から振り返りの型を見直し、授業導入時に前時の自己の課題と、それをどのように改善するかを記述させる欄を設けた。

抽出児Aは6時間目の振り返りに、「質問したいけど英語で言えなかった。だから、それを踏まえて質問文を考えて練習したい。」と記述していた。さらに友達と練習したり、Google 翻訳で発音を聞いたりすると、自己の課題解決のために学習を計画、実行した。終末には「What ~ do you like?」「What time did you ~?」の表現を覚え、友達に試していた。計画した学習方法とその理由に整合性があり、「帰属」スキルが発揮されていることが分かった。



② 検証②

ア 自己調整スキルの表出の量的な検証

評価	割合
◎評価	20%
○評価	44%
▲評価	36%

上位64%をさらに分析

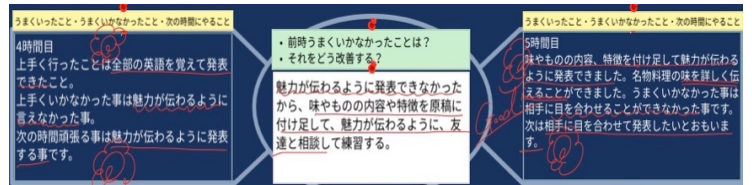
イ 自己調整スキルの相関性の検証

【結果】
3点：6人／2点：9人／1点：7人

(4) 実践4 NEW HORIZON Elementary English Course 6 “Unit4 Let’s see the World” における自己調整スキルの発揮と表出

① 抽出児Aの自己調整（主に【帰属】）スキルの発揮と表出の質的検証（5時間目/全8時間）

抽出児Aは4時間目の振り返りに、「(おすすめの国の) 魅力が伝わるように言えなかった。だから、(それを踏まえて) 味やものの内容や特徴を原稿に付け足して、魅力が伝わるように、友達と相談して練習する。」と記述していた。原稿への付け足し、友達と相談、練習と、自己の課題解決のために学習を計画、実行した。終末にはピザの味を「It’s delicious.」、ベネツィアグラスの特徴を「It’s beautiful.」と表現を付け足すことができた。計画した学習方法とその理由に整合性があり、「帰属」スキルが発揮されていたことが分かる。



② 検証②

ア 自己調整スキルの表出の量的な検証

評価	割合
◎評価	24%
○評価	53%
▲評価	23%

上位77%をさらに分析

イ 自己調整スキルの相関性の検証

【結果】
3点：9人／2点：10人／1点：7人

6 結果と考察

(1) 抽出児Aの自己調整スキルの発揮（主に【帰属】）と表出の質的検証

実践1, 2では、授業における抽出児Aとのやり取りや発言の中で、選択した学習方法と、その理由を聞き、どのように児童の「帰属」スキルが発揮され、表出されるかを検証した。実践1では、自分の課題をあまり意識せずに学習方法を選択している様子であった。そのため「帰属」スキルの発揮が弱く、学習方法の内容が抽象的で不十分であった。実践2ではループブックをもとに、振り返りの内容を紹介し、周りの児童がどのような理由で、どのように学習しているかを共有したことで、学習内容を具体的に考え、計画できるようになった。自己の課題を意識し始め、明確な理由をもって学習方法を選択できるようになり、自己調整力の高まりが見られるようになった。しかし、やりとりによるものだったため、児童に思考した跡が残らず、「帰属」スキルの表出を自覚するのが難しかった。

【実践4】抽出児Aの発表の変容
○単元前半（3時間目）
食べるってなんだっけ？(友達に質問)
You can eat pizza.
You can … see ピザの斜塔。
You can …buy…buy…buy…
You can buy Venice glass.

実践3, 4では上記の課題を改善すべく、振り返りカードの型を見直した。いずれの実践でも、前時にうまくいかなかったことと、それをどう改善するかを記述させたことにより、自己の課題を把握し、どのように課題を改善するか学習方法を選択する姿が見られた。学びを自己調整した結果、発話量や英語表現が豊かになり、相手意識をもった発表の仕方も身に付き、実践4では右のような変容が見られる結果となった。

以上のことから、どのような理由で学習方法を選択したかを理解することで「帰属」スキルが発揮され、自分に最適な学習方法を選択・実行できることが分かった。

【実践4】抽出児Aの発表の変容

○単元後半（8時間目）

Let's go to Italy.

You can eat pizza. It's delicious.

You can see ピサの斜塔. It's big.

You can buy Venice glass. It's beautiful.

Italy (is) a nice country.

(2) 学級全体の自己調整（主に【評価】【適用】）スキルの発揮と表出の量的検証

①自己調整スキルの発揮と表出の量的検証結果

評価	実践1における割合	実践2における割合	増減
◎評価	3	16	+13
○評価	34	56	+22
▲評価	63	28	-35

評価	実践3における割合	実践4における割合	増減
◎評価	20	24	+4
○評価	44	53	+9
▲評価	36	23	-13

実践1から2にかけてルーブリックによる相互評価や振り返りの共有により語彙数や内容に広がりが見られた。また、児童が自分自身の振り返り方を見直せるようになった。実践3, 4では、振り返りの視点を「自己の課題」と「どう改善するか」に絞り、振り返りカードに記述させたことで、どのように課題解決するか自己決定できる児童の割合が増加した。

②自己調整スキルの相関性の検証結果

評価	実践1における割合	実践2における割合	増減
3点	8	22	+14
2点	42	56	+14
1点	50	22	-28

評価	実践3における割合	実践4における割合	増減
3点	26	35	+9
2点	39	38	-1
1点	35	27	-8

実践1, 2では、「次の時間にやること」と「次時での成果」との相関性が高まった。実践3, 4では振り返りの視点を絞ったことで、記述内容がより具体性を増し、自分の振り返りを次時の学習方法として活用する姿が見られた。この結果から、本研究では、リフレクションのさせ方を工夫することで、「評価」スキルと「適用」スキルの相関性が高まり、自己の課題に対する妥当な学習改善が図られるようになった。

以上の取り組みから児童は、自分の学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら学ぶことができる力が身に付き、自分で課題を自覚し、解決していくようになった。そのため、自ら学びを止めることなく、自走することで学びを自分のものにするようになり、伝えたい内容やそのために必要な英語の伝え方などが実践前より充実していった。また、各単元の終末では、児童が自信をもって英語で発表したり、やりとりしたりしている姿がたくさん見られた。このような姿は、外国語科「学びに向かう力、人間性等」の目標である主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の一つと言える。

7 結論

自己調整力を身に付けるリフレクションのあり方を工夫することで、自己の課題を意識し始め、課題解決のための改善策も言語化することができ、自己に最適な学習方法を明確な理由をもって選択し、主体的に学習に取り組むことができるようになる。

8 課題

- ・児童は表現面に注目しがちなので、内容面の自己調整を促す学習課題、声掛けの工夫ができるように考えていく必要がある。
- ・自己調整することが目的にならないよう、単元や自分の目標に向かい、目的意識を明確にもたせる必要がある。
- ・修正した振り返りカードで追実践をし、自己調整力の向上や再現性を検証していく。

9 引用・参考文献

- ・文部科学省『学習指導要領』, 2017
- ・文部科学省『児童生徒の学習評価の在り方について』, 2019
- ・文部科学省・中央教育審議会『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』, 2021
- ・ZIMMERMAN, B. J『Becoming a Self-Regulated Learner.』, 1986
- ・SCHUNK, D. H and ZIMMERMAN, B. J『Self-Regulated Learning -From Teaching to Self-Reflective Practice-.』, 1998
- ・木村明憲『自己調整学習—主体的な学習者を育てる方法と実践—』, 2023